

## 三部字輪觀圖像の成立

真 鍋 俊 照

### 一 問題の所在

三部字輪觀は古くから天台宗・真言宗ともに三部四処輪觀と別称するが、その所説は『大日經』第五、字輪品第十による。この所説にもとづく布字図は、三部字輪を主体とする。すなわち仏部・蓮花部・金剛部の三部の種子ア、サ、ヴァを觀想するために墨書または朱字で字輪を描く。これは主として法身大日如来の大定・大悲・大智と団体であるサマーヅ（三摩地）を體現するための法具（觀行の図）として記録されたものである。これには(1)布字図と(2)圖像が伝承されるが、圖像は新しく発見された資料である。本稿では(2)の新品によつて、わが国における大日經・字輪品の展開が、究極には布字図だけではなく圖像をもなつて成立していた事実をつきとめようとする。

### 二 布字図の解釈

布字は三部の真言ア(a)、サ(sa)、ヴァ(va)の梵字(三字)に牙声カ(ka)の二十字に遍口声ヤ(ya)を加えて、帰命の

句を冠しながら念誦する。それぞれの字輪は、額・喉・心・臍の四処に觀じ、それは発心・修行・菩提・涅槃の意を表象する。この意のもとに各々の梵字をみると、発心は無点の字輪、修行はアー(𑖀)点の字輪、菩提はアン(𑖂)点の字輪を、最終的な涅槃にはアツハ(𑖄)点を觀ずるよう指示がある。こうして觀想化された梵字は数重の字輪をもなつて圖解化されるのであるが、その際に法身との係わりあいが重視される三密加持の展開も究明する必要がある。しかしここでは布字図にともなう圖像学上の要因を見きわめるだけにとどめたい。

布字の字輪は生の意味で、使用する悉曇の字母も各諸字を転生するのでそう呼称する。布字を主体とした三部四処輪觀については既に概要がある。その目的は個々の経過において微妙な次元で異なるが、究極的には大日如来の身光を觀ずることになる。すなわち「此四徳円具して終りに方便究竟を成ず一切処に觀ずる位これなり。また字輪を觀ずる時輪より光

明を放つ、この光明に照らさるゝものは悉く罪障を消滅す。字輪は三部の真言心たる阿・娑・嚩の三字および五類声中に等分声五字を除く二十字および遍口声中に当体重の濫字を除ける九字よりなる。」この字輪觀を百光遍照王の觀に比較するならば、三部字輪觀は行徳を表示し百光王は果徳を表示する。そして究極的には大日如来の頭光を觀することになる。以上のように布字図は、それぞれ觀想を介在させて、

### 三部字輪觀↓身光

#### 百光遍照王↓頭光

と法身の全体像を組みたてる。これは新しいものでは覺千が記録した『自在金剛集』第五の「四処輪布字法」にその用法が詳しく説かれてゐる。この次第を順にみてゆくと發心の額とは、「第一眉間発心輪」(大日仏、第三四、一九一b)とあり眉間である。これは古くは覺超(九六〇—一〇三四)の『三密抄料簡』にみえるもので「三密抄料簡云。頭為阿字位眉間白豪処最中置阿字。其阿字外正直当于兩眉之間。與阿相對先觀三迦字。次々右旋觀布文」といふ。布字の後は菩提心真言を誦しこれを加持する。この加持を含めた三密行の行為を前提にした場合、字輪觀の図解化は様々な意味を伴なつてくる。むしろ内心では真理法界(又は法界法身)の立場と修行者としての自己とが自身の中で対立することもあろう。そのよ

うな場合、眼前の字輪、念すべき字輪は自己の中に入りこんで、本尊の意密と行者の意業が融合不二となるよう表象化される。行者が法界法身を本尊として仰ぎ、常にそれを礼拝し供養する立場をとるならば、字輪觀の中においても行者の意業が活動する。しかし実修の段階では「本尊の三密と行者の三密と平等法界を自證」しなければならぬ。これは觀想を組みたてる次元で、字門布列の描写を前提にしながら何度も本尊に近づこうとする行者の側の發想である。自證とは胎藏五仏の種子ならば、通觀本有五大の字を、文字の内に向うより配列することである(『別行秘記』六)。いうまでもなく字輪觀は、入我々入觀、正念誦とともに三業を本尊に同化させることが目的であるから、布字図の必要性は『大日經』字輪品の成立と同時にあつたと考えられる。略図のようなものは同品が説く、仏、蓮、金の三部の種子と、これを周匝する悉曇の体文(父音)三十五字のうち鼻音の五字と、重体のランの六字を除いて二十九字を布置することが所説の中にある。むしろ所説には図解を可能にしうる方法(布字輪の位置、順序)が既に内蔵されているから、字輪品の翻訳直後に布字図が出る可能性もあつたと考えられる。字輪品のうち

四処輪は四徳を満ずる義をもち、その四徳を円具、終究的には方便究意を成ずる一切の場所に觀想の基点を置く。四処はこれを基点として広がり、字輪を觀する時輪より光明を發す。先述した身光の成就がここにある。四処輪については天

台系の口決で覚超が著した『胎藏三密抄』に「四処輪玄法三巻軌。此題云転字輸入八曼荼羅品。撰大儀軌題云大悲胎藏転字輪成三藐三仏陀入八秘密六月成就儀軌」(大正藏、第七五巻、六二一c)という。ここでは『玄法寺軌』の系統を引きながら、四処輪と転字輸入八曼荼羅品からの依用であることを示唆している。この場合の四処は「眉間咽心臍」(同、101)と同じであるが、「初行果円寂。方便一切処。身外如光焰」(同、111、121)と身体中に光りを放ち、伊等の十二字を外へ散布するところが表現形式としては詳しい。このことは四処輪具現の際に引いた『玄法寺軌』を底本の一部とみなした覚超が、身光を重視していたことを示す。さらに同師の『三密抄料簡』下巻に詳説する四輪布字法を考えあわせると四処輪の布字は、三密加持から展じた除障の意味づけがあつたと考えられる。ここでは数珠法、加持数珠法、四種念誦、五輪異名、十二宮等の問答を行い、最後に顕密劣観、除障論を説く。この除障について覚超は、三密加持の真言にはおよばずと述べ、なお「除障之勝術は三密の教門」という所説を基点におくことを確認している。ただこの勝術をうながす勝身の前提条件が必要である。三部輪観図そのものからみれば四処輪は図像化の一步に手前にあり、全身の三昧耶とも解釈できる。金剛界の好例は『自在金剛集』第五の「勝身三昧耶印記」にいう「勝身トハ自受報ナリ。三昧耶トハ法身ナリ。」

(大日仏、第二四、一九一a)であろう。これは円行が恵果からうけた結印からの発想(同、一九〇b)であつて、「此ノ印前ノ三昧耶形ヲ變ジテ以テ仏形ト爲ス」(同、一九一a)と仏形を想定するところに特色がある。そのかたちを「理智身理智智法身」と名付けながら、印相を基調として仏形をシンボル化する。つまり、ここでは変異の可能性を秘めた仏身の規定のしかたに問題があるように思われる。印相はいうまでもなく「住ニ此形中ニ名ニ自受用報身」(同、一九一a)とあるように、所説にもとづくものは冥合の印である。むしろ報身は三身のうち仏を実践面の行の中からとらえた報いの仏身である。法身は仏の本身である法をさす。かたちとしては前者が情景描写をとともなる場合があり、後者は三昧耶など抽象的な觀念の描写をとともなる。その觀念的な表現を重視すればそれほど印相との関係は強力な意味をもつ。

その法身に布字法を組みたてたものが天養元年(二四四)写の『法身三密観図』(石山寺藏)である。(天養元年六月二十七日於<sub>テ</sub>光明山草庵<sub>ニ</sub>以<sub>テ</sub>三昧刻<sub>ヒ</sub>拭<sub>ヒ</sub>汗書<sub>リ</sub>了<sub>ス</sub>。経雅)と奥書があり光明山から伝承された経雅本である。これには大永五年(一五二五)写の金剛三昧院本や桜池院本があるが、原本が空海の著作かどうか古来から真偽が問題にされている。本文中、別本の部分<sup>①</sup>はともかくとして法身の字輪観図は『性靈集』第三の「円図」<sup>②</sup>に該当する訳図と解釈してよい。図は三

つあり、ともに三重の同心円で最外の周を各々四十に分ける。中の文意は『大聖文殊師利菩薩讚仏法身礼』の四十一頌より引いたもので、最外の円は第一頌第一句「無色無形相」(大正藏、第二〇卷、九三七)を身密観、第二句「無根無住処」(同)を語密観、第三句「不生不滅故」(同)を意密観として右廻りに記入する。第二重円は第四十一頌目の「一切平等礼無礼無不礼一礼遍含識同歸実相体」(同)を同じく右廻りに配す。内側の円には阿(ॐ)、娑(ॐ)、縛(ॐ)を蓮台上に置くが、石山寺藏本のように「娑」の梵字を天地逆にして書く場合もある。梵字の周囲には八葉の蓮弁を描写するのが通例である。このように法身を対象に三密観を具現化する略図が現存するわけであるが、その構想は「四十行の頌、一行ごとに四句あり上の三句を以つて三密に配す。下の一句は皆、敬礼無所観という。四十行俱に同一言なり、故に図中に之を挙げず。蓋し、敬礼は心に在るが故ならん。其の制且く円図に就て之を云わば、三の円相あり、以つて三密の図となす。横に四十行の第一の四十句を取つて右行の一の円画の中に並べなじ、身密の礼の図となす。之を読むに循環転釈して文旨鉤鎖し、義理幽邃あり。宛も瑜伽の中の字輪観の如し。又横に第二の四十句を取り、右行に一の円画の中に並べ布く。口密の礼の図とある。又横に第三の四十句を取つて右行に一の円画の中に並べ置く。意密の礼の図となる。円図三にして成る。

一句ごとに一礼三あり。四に乗じて一百二十礼となる。方図も当に准知すべし。然も図後に曰く、三密は即ち三部なり。三部とは仏・蓮・金なり。即ち大悲胎藏において円壇の諸尊を撰尽すと云えり。」「(『便蒙』)にもあり、『性靈集』にいう「方円二図」を作つて義註を撰したという。「一百廿の礼」とは『大聖文殊師利菩薩讚仏法身礼』中に出る第四句敬礼無所観をいう。名称はこれを省略したものが一二〇句なので、そう呼称したのである。ただし三部は、「大悲胎藏の円壇の諸尊を撰尽す」というように像を出現させる要素をとまなつてゐる。したがつて、こうした布字化を前提にした場合、法身の分析とそれにとまなう図像化も可能ではなかつたかと思われる。

### 三 図像の成立

従来、三部字輪観には布字図しか知られていなかつた。しかし図像が現存する。それは「三部四処字輪観図」(南北朝時代)と呼称し、紙本墨画(たて八八・五、よこ六四・五センチ)の掛幅装である。本図はもと称名寺の聖教として伝承されたもので、全図は四枚の紙継ぎの上に流麗な白描図像をえがく。宝冠の大日如来(胎藏界)で、禪定印を結び蓮華座上に結跏趺座し、長髪を両肩まで垂らす。像の上から朱色の三重円を頭、心、咽、臍の四ヶ所、横列に三輪づつ配す。計十二輪の種子は朱色であるが、面部下には淡い墨線がみられる。種子

は上段中央の眉間に阿(ㄹ)、その第二重円には父音の迦以下二十八字を書く。右側は娑(ᄃ)は第二重円に二十字、第三重円に七字を書く。左側は縛(ᄃ)は第二重円に五字のみ書き、第三重円は空白。中段中央の咽に阿(ᄃ)、その第二重円には長韻で二十字、第三重円には八字のみを書く。この字数は右側、左側とも同じ。下段中央の心に暗(ᄃ)、その第二、三重円は省略して空白。最下段中央の臍に噫(ᄃ)、その第二、三重は省略して空白。以上のように図像と字輪観が一体となつて作画されている。この事実をみると既に述説してきたように布字図と法身を同次元に位置づける考えかたが、この白描図像を考案する以前にあつたと解釈せざるをえない。たしかに三部字輪観の真言を口誦する立場は、今日でも延命院元果の私記に伝承されているのと同じである。しかし「りんくわん」という言葉が金沢文庫古文書や満濟准后日記に引用されている例を考えると、口誦を重視しながらも布字図以上の、図像が作画された可能性が他にもあるように考えられる。本図の描線をみると宅間系の運筆であることは、称名寺に現存する他の遺品によつても裏づけられよう。しかしここで大事なことは三部字輪観が身光を基盤にして成り立つてゐることである。この点を考えれば、本図は描写力より教理が先行して成り立つた図像とみなすことができよう。教理には覺鑊以降、急速に高まつた五輪との係わりあいをみなおす

必要がある。むろん覺鑊にも「興教大師御作目録云。法身礼図一卷方円二図」（石山寺本）と伝があるように『法身三密観図』との関係も考えられる。それは持明房によれば、三部字輪観は布字する身体の中に曼荼羅身を必要とするのである。「三部四処輪布字法。持明房決云。布字謂法界曼荼羅身成。」（『胎記諸会末』大正図、第八卷、一三六c）というように持明房真譽（一一三七）の口決には、図像化につながる伝承が潜んでいたようにも思われる。さらに十五尊の図像すなわち「觀身如三仏形」あるいは「これ全身先ず仏身となるなり、之を理法身とす。」という『瑜祇經』所説の「十五尊布字住所」（称名寺藏、二九七函）の影響も考えられる。これは金剛薩埵の尊容に本有胎藏法界定印を示す図像で、慈猛意教流頼中の相承である。むろん金剛界は曼荼羅観を重視したので口密である。

結びとしてこの図像が宅間系のものであることは既に述べた。この宅間系とは高山寺を中心に活躍していた絵仏師であるが、高山寺関係者に三部字輪観関係書を写した僧がいたかどうかである。それより以前、『法身三密観図』を高野山月上院の玄証が書写したことがある。これは高野山の桜池院藏本の奥書「承安三年五月十一日書写此校了 高野山月上院玄証」丁酉歳仲夏二十一日 常喜院心覺宰相阿闍梨御房本校了」によつて知られるもので、それは承安三年（一一七三）

という。玄証は後に高山寺に住んで多くの図像を残した。玄証は恐らく三密観図の書写だけにはとまらなかつたのではあるまいか。その模本が宅間系の手に入つたとしても決して不思議ではない。さらに三密観図を図像の収集として著名な心覚が写していたとなるとなおさらである。いずれにせよ、三部字輪観の図像は身光と布字の關係で先ず成り立ち、曼荼羅身を強調する次元で図像化の構想が具体化したとみられる。その時期は遅くとも鎌倉時代の前半である。

1 大正蔵、第一八卷、三〇b。また字輪建立の構想等については、『大日經疏』第一四、『次明字輪品』第十(大正蔵、第三九卷、七二c—七二五b)を参照。普遍的なものでは、『胎藏界念誦次第』の秘密道場分に出る。

2 高井隆秀「真言密教における観行について」(『仏教における行の問題』所収、二一六—一七頁。)加持成仏は三密瑜伽のとき本尊身を現じて仏になる。この三摩地からの発想とまた真言密教の基本的な立場、本有本覚の法門において、仏が仏になるという前提にたつならば、布字図は平安時代後期から鎌倉時代初期にかけて百光遍照図と同時に作図されていたものが、時代が降るにつれて次第に分離されてくる。

3 那須政隆「密教における真理観の諸形態」(『仏教の根本真理』所収、六四五—六四七頁。『密教大辞典』八二二頁、三部字輪観の項。その他に次の資料がある。

「百光遍照布字図」(持明院本) 一紙

与謝郡九鬼山西光寺大疏諸伝之日以能化等空師之御本写得為了

三部字輪観図像の成立(真鍋)

苾芻律開「百字輪」(朱線で大日如来を描き、身体および周辺に梵字を配す)他に別本「三部四処輪百光遍照示座図」(金剛三昧院本、表紙とも七紙)あり。

4(1) 布字図の各本は次のとおり。「三部四処輪并百光遍照図」中(三寶院藏書)「仏子寿雄(五紙)第一輪、第二輪、第三輪、第四輪、(紙に墨で字輪をかく、字は梵字)」「奥書」(亨徳四年己亥五月十八日於高野山如意輪寺宥勢法印之御本書写畢 金剛仏子実盛生年廿三、明暦六年、元禄十四年、元文二年、安永七年、享和元年、文化九壬申十月七日以見人本校合了 俊雄) (2) 「三部四処輪百字輪百光遍照」(光台院本) 苾芻律嚴(表紙とも六紙)字輪九個、(梵字のみ字輪)。

〔奥書〕「文化五歳以戊辰天中夏七日於丹後国」  
〔奥書〕「三寶院憲深流 南部東大寺新禪院経藏 以御本写憲深僧正御自筆 第六之伝本也 朝意 順良房 五十九歳 在判 長精書写畢」

5 『大疏演奥鈔』四十七、「胎藏対受記」五。

6 大日仏、第三四、一九一a、二〇〇b。覚千(一七五六一—八〇六)とは「寛政二年十月以西塔院大仙観公之本<sup>ス</sup>写<sup>ス</sup> 此本布法前本妙法院本所謂三部総合布字也 山沙門覚千誌」にみえ、布字が三部(ア、サ、ヴァ)の総合的な表象であることを認めている。この布字法の原本は「此ノ布字法口決一本者。原、妙法院庫之本也」(同、一九七a)とあるごとく、妙法院の抄本である。覚千の自筆本は、寛永寺に「寛永寿子院現住法脈記涼泉院覚同法脈」(もと二十巻)が九巻残っている。

7 大正図、第八卷、一三七a。

三部字輪観図像の成立(真鍋)

8 註3同書、六三六頁。

9 大正図、第十二巻、二七頁。『弘法大師全集』第四巻、八三九〜八五二頁。

10 智山の運徹は開陔編辨疑附「三密観辨疑」にて真言宗義の部分を偽作とする。(『弘法大師全集』第四巻八五一頁)。吉祥真雄氏も同じ説(『仏解』第巻、一〇六頁)。運徹の擬しかたは信憑性に乏しいという。高木諄元「空海と最澄の交友について」(高野山大学論叢、第二巻、一四頁)。

11 『日本古典文学大系』第七一巻、二二六頁および五〇〇頁における宮坂宥勝博士の註。

12 称名寺藏・神奈川県立金沢文庫保管。『金沢文庫図録』(絵画編)一二四頁に有賀祥隆氏が解説をよせているが、「百光遍照図との関係は述べていない。しかし二九三函に「三部四処輪并百光遍照図」があり、また禅海手択本「百光遍照図」(同、二九七函)があるように、この絵はもともと百光遍照を前提にして図像化されたものである。なお百光遍照王については酒井真典『百光遍照王の解明』を参照。

13 母尾祥雲『秘密事相の研究』四一九〜二〇頁。三部字輪観の付属のものとして鼻音字輪観をあげる。この四処観は、醍醐延命院元果『胎藏界念誦私記』によれば菩提心三昧耶句、菩提行発恵、成菩提補闕寂静涅槃をいう。

14 金剛界では「頓悟三密漸入一心図」(同、二九七函)に「九会所詮口密以極位也 已上教門」とあるように口密の位置づけをいう。

(昭和四六年度文部省科学研究費奨励研究による成果の一部)

新刊紹介

五〇

宇井伯寿著

「インド哲学から仏教へ」

A5判・本文五六六頁・定価五五〇〇円  
岩波書店・昭和五十一年二月二十七日刊

野村耀昌編

「法華経信仰の諸形態」

A5判・本文五八五頁・定価七五〇〇円  
平楽寺書店・昭和五十一年三月二十日刊

安井広済訳

「梵文和訳 入楞伽経」

A5判・本文三五七頁・定価六五〇〇円  
法蔵館・昭和五十一年七月十日刊